

## 第6回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時：平成22年8月12日（木） 午後1時30分～3時30分

場所：京都ロイヤルホテル&スパ 2階 翠峰の間

出席委員（敬称略）：

井上八千代委員，岡田暁生委員，清澤悟委員，小林千洋委員，鈴木千鶴子委員，  
千宗室委員，富永茂樹委員，西島安則委員，林典子委員，平井誠一委員，  
村井康彦委員，森田りえ子委員，山中英之委員，山本淳子委員，細見吉郎委員

事務局：

山岸吉和文化市民局長，平竹耕三文化芸術都市推進室長，  
内山修文化芸術都市推進室担当部長，岡野哲也文化芸術都市推進室担当部長，  
北村康二文化芸術都市推進室担当部長ほか

### 1 開会

### 2 委員紹介

### 3 議事

#### (1) 会長・副会長の選任

#### (2) 京都文化芸術都市創生計画の見直しについて

ア 計画の進捗状況

イ 文化芸術における行政の役割

ウ 今後における取組の方向性

#### (3) 意見交換

別紙のとおり

### 4 閉会

## (別紙) 意見交換摘録

### <議長>

京都文化芸術都市創生計画(以下「計画」という。)全体が俯瞰的に見えていない状態では、議論というのは一般論になりがちであるが、今回は初めて出席される方もおられるので、それでよいと思う。計画の見直しということであるが、それぞれ専門の分野で御活躍いただいている方ばかりだと思うので、日頃感じておられることを発言していただければと思っている。

### <委員>

計画の9頁に、「10年後の姿」というのがある。こういった理想像が示されることは具体的でよいのだが、気になるところがある。それは下から11行目の「一年を通して市民や観光に訪れた人々を魅了しています。」というところである。市民と観光客は全く性格の違うものである。市民を対象としていけば、全体的な文化的幸福度を高めることを目指すべきであろうし、観光客が対象であれば、ソフトの魅力で外から観客を呼ぶことに重点を置くべきであろう。この計画は、どちらに対しての支援に重きを置いているのか。

### <事務局>

確かに、市民と観光客は性格の違うものである。特に、観光客については、市内部の観光のセクションと、どのように連携していくのかを考える必要がある。その部分についても、委員の皆様方からお知恵を頂戴したいと考えている。

### <議長>

計画の11頁の表は、非常にわかりやすく考え方が示されている。我々は、この表を念頭に置きながら、議論を深めていく必要がある。

### <委員>

この表を見る限り、市民に重点を置いていると思う。ヨーロッパと比べて、例えば宿泊するホテル等で、今日どのような催しがあるかをアドバイスしてもらおうようなことが、どの程度京都でできているのか。

### <議長>

京都駅に市と府で設置している観光案内所があり、そこでの案内はなされているが、イベントのデータが集約されているものはないと思うので、今後重要である。

### <委員>

24頁に掲載されている京都文化祭典に参画させていただいている。京都文化祭典では、総合パンフレットを制作しており、秋の時期に京都で開催されている事業を集約している。昨年は、全部で246事業を掲載した。このパンフレットを利用して、いかにわかりやすく事業を提供できるかという工夫に6年間傾注したといっても過言ではない。今年は、携帯電話でも検索できるサイトを実験的に制作する。京都には、年間通じて何かしらイベントが実施されている。こういった情報をどのように提供していくかという意見が、京都文化祭典の会議の中でも出ていた。

京都を訪れる観光客が多いのは、京都の文化・生活に触れて日本人の持つ精神を知るからである。これからの時代は、「文化力」が都市運営の重要なポイントになる。そのためにも、京都文化祭典をエジンバラの芸術祭に負けないような市民のための祭典にして、京都に来てもらい、文化に触れてもらいたいと考えている。そういった点でも、イベント情報の集約は重要である。

<議長>

京都文化祭典に携わってこられて、何か問題となる点はあったか。

<委員>

秋期の約1箇月半であるが、冊子にまとめてみると似たような事業がたくさん開催されている。これらを束ねようと考えたが、個々の事業には立ち上げた方の意志があり、容易ではない。そのあたり、本日会議に御出席されている方々のお力を拝借できれば幸いである。

<委員>

私は職場が京都で、京都市外の住人である。外部の視点として、この計画に記載されていることがすべて実現されたら、京都は素晴らしいブランド都市になると思う。しかしながら、この計画には、市民の意識の持ち様と行政との接点、また、行政組織の在り方、人材育成に関しての戦略がいささか欠けているように感じる。昨今、アートトラストと言われるように、市民の草の根的な動きを利用する事業がある。もう少し、市民の意識を利用するような事業があってもよい。その接点となる施設として、京都芸術センターは非常に重要な役割を担っている。最近の市民はアートに精通しており、洗練された企画を求めている。市が所管する文化ホールや、事業を企画する市職員の意識改革など、組織を戦略的に動かす必要がある。

<委員>

このような会議で、京都芸術センターが評価されることは非常にありがたい。皆様のお陰で10周年事業を好評のうちに終えることができ、この場をお借りしてお礼を申し上げます。私自身、日々事業の最中であって、高所から京都の文化芸術について考える余裕がなくなっているが、創生計画には五つの柱があり、京都芸術センターはその全てに関わっているとも言える。個人的には、芸術によるまちづくりをもっと進めたい。御存知のとおり、京都芸術センターは明倫学区の真ん中にあり、地域の理解を得ている。10年前と比較すると、かなり周辺の様子が変わってきたと感じる。10年前は夜の会議を終えて外に出ると周囲が真っ暗であったが、最近は飲食店も出来てきてかなりまちの風景が変わった。内心、京都芸術センターの設立が契機ではないかと自負たりもしている。また、三条には新風館ができ、そこから京都芸術センターまでの道を歩いてみて思うが、1本の芸術文化の道が出来たのではないかと感じている。このような道が、京都中に増えていくことで、芸術に導かれて人々が集まり、それが市民生活の向上にも繋がっていくと思う。

<委員>

最近、京都芸術センターが大上段に構えているような印象を受ける。来館者を眺めていても、皆特別な気配を持っており、たまにそうではない方を見つけると地元の方であった

りする。芸術・文化というのは、それだけで少し構えてしまうところがあり、なかなか気軽に参加できないものである。京都芸術センター界限、室町通や新町通にお住まいのお年寄りの方々は、自身の家を開放することに躊躇されない方が多いように思う。そのような方々のお力をお借りして、京都が培ってきた「保守」の文化を見せる事業を展開して、まちづくりへと結び付けていってはどうかと考える。祇園祭のときだけ義務的に開放するのではなく、竈や井戸など日常の生活の一部を見せることで、かつての生活に思いを馳せ、見る人の想像力をかきたてることができれば面白い。頑なな人生は、いずれ後悔を生む。一部の人々を満足させるのではなく、色々な人が文化に触れる機会を提供する環境を作ることも重要である。仮に、芸術文化の道を作るのであれば、三条通は最近ごちゃついているので、西陣界限がよいのではないかと思う。

<議長>

前回の会議でも「生活」と「芸術文化」というのは議論になった。日常における文化を理解し、育んでいくことは、市民の文化レベルを引き上げることに繋がる非常に重要な視点である。

時間も迫ってきたので、この機会に全ての委員の方々に御発言をいただければと思う。

<委員>

「保守」の文化というのは非常に大切に、基礎にすべきものであるが、一方で、先端の文化も取り込む必要がある。私は、美術記者を長く担当してきた関係で、京都でビエンナーレやトリエンナーレをやりたいという声をよく耳にする。しかし、それには莫大な費用がかかり、断念されることが多いのだが、最近の動きで注目しているものがある。それは作品の売買をする「アートフェア（見本市）」である。今年に入って、町中のホテルと杉本家で開催された。こういった民間の自主的な文化活動に対しての支援であれば、例えば、使っていない学校跡地を提供するとか、行政が無理なくサポートできるのではないか。国際的なアートフェア、例えば、スイスのバーゼルで開催されるものでは、約650億円の売上げがある。国際観光都市の京都は外国人を引き付ける魅力があり、スケールの大きなアートフェアに発展する可能性は十分ある。支援に向けた検討の余地は、十分にあると思う。

<委員>

アートフェアの支援には賛成である。ただし、規模の小さなものであれば効果がないので、行政の支援とPRに力を入れて盛り上げていくことが大切である。

<委員>

事前に資料をお送りいただいたので、一読してきたが、計画の11頁の表について確認しておきたい。「地域」と「まち」はどのような関係にあるのか。個別の「地域」があって、市全体を指す「まち」があると捉えてよいのか。

<議長>

そのように考えていただいて問題ない。

<委員>

少し補足説明をさせてほしい。基本的には、地域の集合がまちを成すと考えてもらって

よいが、京都には世界遺産となった寺社等があり、また自然も含めて美しい景観が残っている。例えば、どこかで伝統芸能を鑑賞した後、一步外に出れば、その演目に関わる風景が広がっていたりもする。そのような都市であることが、他都市で見ることのできない京都のまちの特色である。

<委員>

今回の計画の見直しに当たっては、直観的なこと、遊び心も忘れないでほしい。一つの事例であるが、ひと夏、先生の横について刺繍を学んだ学生が、1年後に三次元の素晴らしい刺繍の装飾を製作した。これは、自分の感性で学んだことを応用したからであり、あまり真面目になりすぎても良いものは生まれない。時には、直感を信じることも必要である。

<委員>

私が所属する大学では、京都芸術センターの近く、新町通に2008年4月から町家キャンパスを開設している。そこで学生と接していると思うこと、要望したいことが2点ある。普段はゲーム等の自分達の内向きな文化に慣れている学生が、町家に連れてくると意外な程関心を示している。町家が持つある種エキゾチックな部分を感じて、そこでの作法等も楽しんで覚えようとする。これは、チャンスさえ与えてあげれば、文化に溶け込んでいく可能性があることを示しており、寺社等の文化施設においてもっと学割があればよいと思う。また、留学生が祇園祭に参加して、それを快く受け入れていただいた。これは非常に重要で、留学生を大切に育てていくことは、日本の文化を発信することに繋がっていくので、計画の見直しに当たっても重視していただければと思う。

<委員>

今、公共政策を勉強しているのだが、今回の見直しに当たっては、国も含めてであるが市の財政状況を念頭に置いて考える必要がある。京都市の財政基盤は他の都市と比べて弱く、今後5年間で好転するとはとても考えられない状況である。そのような状況で考えるべきは、選択と集中という視点をもって、行政すべきことと民間に任せることを区別することである。先程から議論にあがっているイベント情報の集約等は、市で集約するほうがよいのではと思う。そのように考えていくと、行政がイベントを実施する必要性がどこまであるのかという議論になる。このような計画を作成する際には、どうしても総花的になりやすく、色々な事業が掲載されていくものである。しかしながら、今後は、限られた予算・資源をどういった分野に使っていくのかを考えなければならない。そのときに私達は、次世代、子供や若者を重視すべきであると思う。

<委員>

先日、京都芸術センターの10周年記念事業の式典に参加して感動した。このような素晴らしい事業も、なかなかうまく発信できていない。残念ながら、市のホームページは情報量が多すぎて、なかなかそこまで辿り着けないのが現状である。京都以外に情報を発信する力が弱い。商業ベースのイベントというのは、行政としては扱いにくいと思うが、そのあたりは観光のセクションで把握していることも多いと思う。文化と観光が連携して、情報を共有することが必要である。京都に来られる方は既に情報を収集しており、京都に来た時点で勝負がついている。各イベントでそれぞれ広報を頑張っているとは思いますが、戦

略的に京都以外に働きかけていくことが必要である。例えば、「京都文化コンシェルジュ」を設けて、文化のセクションが持つ情報を、観光が持つツールを利用して発信していくというような、垣根を越えた取り組みが必要になってくると思う。京都の中で循環しているだけでは駄目である。大消費地である首都圏では、まだまだ情報が不足しているし、埋もれている事業もたくさんあると思う。

#### <委員>

例えば、先程、京都創生座の公演についての説明の中で「京舞」という発言があった。創生座には日本舞踊として参加しているのであって、「京舞」は日本舞踊の中でも大変特殊な一流派、京舞井上流のことを指す。こういうことの説明のためにも「京都文化コンシェルジュ」は是非専門職で設けていただきたい。今更と思われるだろうが、3頁の中で邦舞という表現でなく、日本舞踊という表記はできないものか。京都というのは、住んでいる者にも日々身近に新しい発見がある。季節の良い時は特に外へ出てほしい。例えば、舞を御覧になる方で、時間のない方には、舞は短時間にして、残された時間は東山を散策すれば、舞の舞台もあり、魂が風景の中に見える。寺社の開門を早めていただくのも、訪れる人、住む人、両方に新たな発見があるのではないか。

#### <議長>

先日、あるお寺を訪れたら、外国人観光客の方が熱心に建物を見学しておられた。単にボランティアで案内するのではなく、もう一步踏み込んだ知識をもった方を市で設置してもよいかもかもしれない。

#### <委員>

本日は、貴重な御意見ありがとうございました。委員の皆様にも色々な意見を頂戴して、非常に心強いが、これが市役所に戻るとなかなか厳しい現実が待っている。先日亡くなられた梅棹先生が「文明は腹の足しになり、文化は心の足しになる。」という言葉を残されている。市民の方々も同様に、腹の足しになる要求が多い。文化施策への要望というのは、優先順位が低い。委員の皆様の御意見を反映させるべく努力をしていきたいが、なかなか難しいのが現状である。先程の御意見にもあったが、市は本当に貧乏で、選択と集中が必要である。この計画に記載されていることを全て実現するつもりではいるが、どれか一つでも100点を取れるものを作りたいと思う。中国が、先歩主義を掲げて経済発展を成し遂げた。これは、1人先に行くものをつくり、それに2番手、3番手が追隨して全体が発展するという考え方である。京都の文化も、まずは何か一つ世界に誇れるものをつくりたいと思うのだが、平等の観点から難しい面もある。難しいとばかり言っても始まらないので、それらの壁を職員一丸となって乗り越えていきたい。

以上